

JENESYS2025 台湾派遣 成果報告書

日台の知恵が拓く持続可能な未来と相互理解

環境エネルギーチーム 上智大学国際教養学部国際教養学科3年 近藤 千代里

2026年3月18日から24日までの7日間、対日理解促進交流プログラム

「JENESYS2025」の一環として、「防災」と「環境・エネルギー」をテーマに、日本の大学生10名が台湾を訪れました。本稿では、日台が共有する災害リスクやエネルギー転換という課題に対し、前半に専門機関の訪問から得た知見、後半に交流や生活体験から浮かび上がった価値観の差異と共通点を整理し、次世代による相互理解を通じた日台協力の可能性を考察します。

技術と実用に見る環境・エネルギーのいま

国家原子能科技研究院（NARI）では、放射線防護や緊急対応体制に加え、核融合やスマートグリッドといった最先端技術の研究開発が進められていました。特に印象的だったのは、ガラスの熱伝導率に関する実験です。実際に発熱防止塗料が塗布されたガラスに触れると、通常と比較して明らかに熱伝導が抑えられており、涼しさを保つ遮熱性の高さに驚かされました。この技術

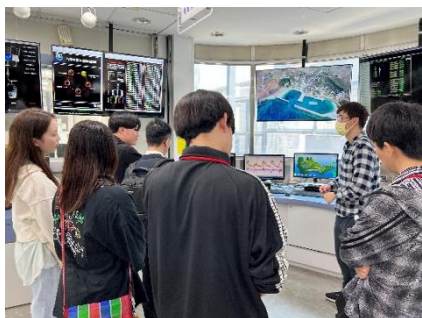


写真1 国家原子能科技研究院（NARI）

は、エアコンの消費電力を大幅に削減して環境負荷を抑える「スマートウィンドウ」として利用が進んでおり、社会と相互作用させながら技術を磨いているのを実感しました。

加えて、福島第一原発事故後の輸入規制や検査体制が長期にわたり維持されていた事実からは、一国の出来事が国際社会に与える影響の大きさと、それに応える形で制度や技術が発展する過程を学びました。台湾という外部の視点から日本の経験を見つめ直すことで、自国の課題を再認識する良い機会となりました。

同日、環境エネルギーチームは寶晶能源（INA ENERGY）社も訪問しました。同社は主に太陽光発電を手がけており、特に屏東で展開されている水上型太陽光発電と地域活性化の取り組みについてお話しいただきました。地盤沈下により利用価値が低下した土地を活用し、発電・農業・観光を組み合わせることで、エネルギー供給にとどまらず、地域の持続可能性自体にも貢献しているそうです。また、AIやドローンを活用した運用管理や、台北事務所での集中管理システムなど、技術を効率化のために柔軟に取り入れるところも見学しました。

このような経験から、台湾における環境・エネルギーへのアプローチは、「技術を社会でどう活かしていくか」という視点を基盤にしていると感じました。

デザインが媒介する社会課題解決

台湾設計研究院（TDRI）の視察では、デザインを単なる「装飾」ではなく、社会課題を解決する強力なツールとして機能させている点に感銘を受けました。特に、投票告知ポスターの刷新や裁判所の空間デザインの改善といった公民連携の取り組みは、視覚的アプローチとして民主主義促進の一助となっている点で印象的でした。制度や政策そのものを変えるのではなく、人々の行動や認識に働きかけることで社会を変え得るところに、デザインの本質的な力を感じました。



写真2 銭湯をリノベーションした図書館

また、歴史的建造物を唯一無二のスタイルで美しくリノベーションする台湾の街並みから、「壊して作る」のではなく「活かして高める」という思想に基づく持続可能な都市づくりを体感しました。

今回訪れた大溪老街はその良い例で、「活かして高める」まちづくりは、資源の有効活用と文化の継承を同時に叶えていました。

最先端の技術という「ハード」と、人々の心や社会の仕組みを整えるデザインという「ソフト」。この両者が相互に補完し合いながら社会課題に向き合う姿勢を目の当たりにして、台湾におけるデザインの役割

の広がりを感じました。

交流の中で見えた価値観と相互理解

交流の出発点として訪れた台湾科技大学（NTUST）では、英語での発表や議論を通じて、同世代の学生が防災や環境・エネルギーの課題に実践的に向き合う姿勢に強い刺激を受けました。また、その後の交流では、中華経済研究院の講義で示された台湾特有の「スピード感」と「おもてなし」も実際に体感することとなりました。



写真3 日台学生合宿 in Taiwan

筑波合宿を経て再会した台湾学生との一泊二日の交流は、制度や技術として学んだ内容を、生活や価値観のレベルで立体的に理解する絶好の機会となりました。

その中で驚いたのは、日常生活における環境問題に対する意識の違いです。台湾では、昨年始まった宿泊施設のアメニティ廃止や、マイボトル持参による割引など、法



写真4 マイボトルで割引

規制とインセンティブを組み合わせた施策が多くあり

ます。中には最近導入された政策があるにも関わらず、台湾学生がこれらの制度を快く受け入れており、NTUSTで言及されていた「スピード感」を実感することとなりました。

一方、日本ではリサイクルや分別のよう

に、生活習慣としての環境配慮が根付いています。それぞれ異なるアプローチでありながら、日台双方がサステナブルな社会を目指す姿勢に、国際社会の一員としての責任を実感しました。

また、BBQ やアスレチックを通じた交流で、台湾学生の主体性とおもてなしの精神に触れました。積極的に場を回し、食事を分け合い、交流の場を演出するその姿勢は、日本の学生には新鮮で、時に圧倒されるほどでした。同時に、規律と統率が是とされる中で生きる日本の学生としては、台湾学生の自由でマイペースな行動様式に、戸惑うこともありました。しかし、対話を重ねる中で、一見相反する「日本の統一性」と「台湾の柔軟性」は、互いに補完し合える強みだと考えるようになりました。

合宿を通して強く認識したのは、文化的な関心を越えた、政治・経済・歴史的な相互理解の必要性です。台湾では、コンテンツ産業などを通じて日本への文化的な理解は広く浸透しているものの、より深い実情についてはあまり知られていません。一方日本では、台湾の政治的事情はおろか、現地で話される言語などの基本的な情報でさえも理解が及んでいないのが現状です。このような事実を目の当たりにして、我が国で教育や情報接触の機会が圧倒的に不足していることに危機感を覚えました。多民族国家としてのアイデンティティや複雑な歴史的背景を知らずして、真のパートナーシップは築けません。だからこそ、実際に体感した「生きた台湾」を、自らの言葉で発信していく責任を強く認識しました。

結論:理解を行動へ

今回の派遣を通じて、台湾に対する理解の不足は知識量だけでなく、学ぶ機会の不足にも起因すると感じました。そしてそれは、環境・エネルギーの課題にも通じています。技術や制度を知るだけでなく、それが社会でどう機能し、人々の行動や価値観とどう結びつくのかを学ぶことが、持続可能な社会の実現に繋がるのではないのでしょうか。

また私は、この JENESYS のプログラムを経て、得た理解を行動に繋げることによって、初めて今回の訪問が意味を成すと考えています。「環境・エネルギー」の面では、小さいことではありますが、まず日常の選択、例えばマイボトルやウォーターサーバーの使用などを見直し、交流面では、台湾の知人と、日常生活に限らず、防災や環境・エネルギー、社会制度に至るまで多様なテーマについて対話を重ねるなど、情報発信を通じて台湾で得た視点や気づきを共有して、相互理解の裾野を広げていこうと考えております。こうした積み重ねが、将来日本と台湾の架け橋としてつながっていくと確信しています。

相互理解は、制度やスローガンによって達成されるものではなく、個々の理解と行動の積み重ねによって深まるものです。この一週間の経験は、私にとってその出発点となりました。このような貴重な機会をくださった日本台湾交流協会、中華経済研究院、JTB の皆様、そして温かく迎えてくださった台湾の皆様にご心より感謝申し上げます。

(3,065)